

1 気象概況（7月前半：果樹研究所）

この期間の平均気温は、20.5℃で平年より1.9℃低く経過しました。降水量は79.5mmで平年の82.5%、日照時間は36.0時間で平年の46.6%でした。

2 土壌の水分状況

7月15日時点の土壌水分（pF値：果樹研究所なしほ場：草生・無かん水）は、深さ20cmで1.6、深さ40cmで1.6、深さ60cmでは1.6となっており、過湿状態にあります。

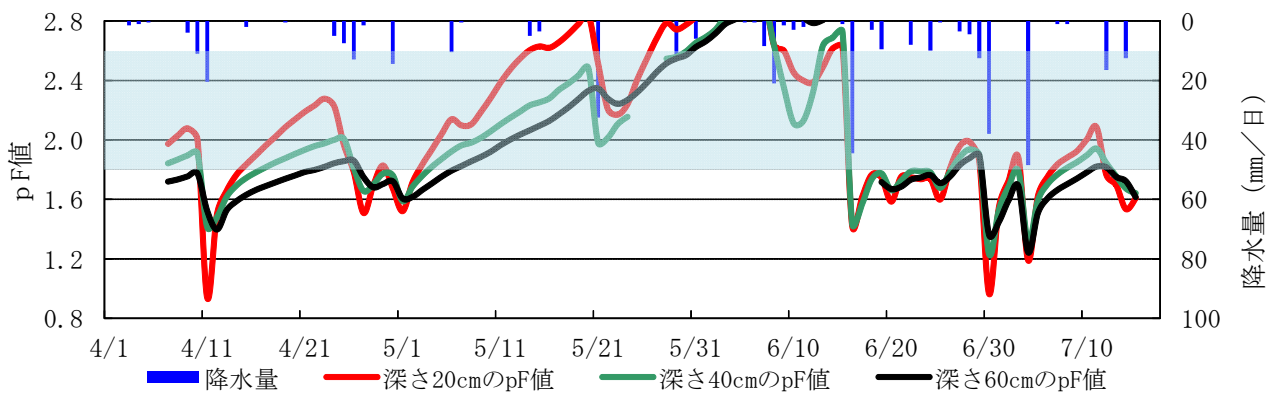


図1 土壌pF値の推移（果樹研究所なしほ場：草生・無かん水）
 図中の網掛け部は、適湿の範囲（pF1.8-2.6）を示す

3 生育状況（7月16日現在：果樹研究所）

(1) もも

ア 果実肥大

暦日比較では、「あかつき」は縦径が63.4mmで平年比115%、側径が66.4mmで平年比117%と平年より大きく、「ゆうぞら」は縦径が54.3mmで平年比111%、側径が53.9mmで平年比120%と平年より大きい状況です。

生育日数による比較でも、「あかつき」、「ゆうぞら」ともに平年より大きい状況です。

イ 新梢生長

満開後80日における「あかつき」の新梢生長は、新梢長が平年比142%と長く、展葉数は平年比107%と平年よりやや多い状況です。葉色は平年比95%となっています。

「ゆうぞら」は、新梢長が平年比148%と長く、展葉数は平年比117%と平年より多い状況です。葉色は平年比98%となっています。新梢停止は、「あかつき」、「ゆうぞら」ともに平年より遅い状況です。

ウ 核障害の発生

満開後85日における「あかつき」の核障害発生状況は、核頂部亀裂が60.0%で平年より多く、縫合面割裂が10.0%と平年より少ない状況です。

エ 収穫期予測

DVRモデルによる「あかつき」の収穫予測（7月16日現在）では、本年の収穫開始は7月30日頃、収穫盛期は8月2日頃で、平年より3日早い見込みです。

(2) な し

ア 果実肥大

暦日比較では、「幸水」は縦径が46.9mmで平年比120%、横径が57.4mmで平年比122%と平年より大きく、「豊水」は縦径が47.4mmで平年比118%、横径が52.9mmで平年比122%と平年より大きい状況です。

生育日数による比較でも、「幸水」、「豊水」とともに平年より大きい状況です。

イ 新梢生長（満開後80日現在）

「幸水」の予備枝新梢長は106.9cm（平年比95%）、葉枚数は29.9枚（平年比98%）、新梢停止率は100%（平年比110%）でした。不定芽新梢長は95.2cm（平年比97%）、新梢停止率は100%（平年比113%）でした。

「豊水」の予備枝新梢長は105.7cm（平年比99%）、葉枚数は28.7枚（平年比99%）、新梢停止率は100%（平年比115%）でした。不定芽新梢長は91.9cm（平年比102%）、新梢停止率は100%（平年比115%）でした。

ウ 裂果の発生状況

「幸水」における裂果の初発日は、7月10日（満開後79日）で平年（7月14日：1990～2018年の平均）より4日早くなりました。

エ 「幸水」の収穫期予測

DVRモデルによる「幸水」の収穫予測（7月16日現在）は、収穫盛期が8月27日（満開後127日）と推測され、平年より4日早い見込みです。

(3) りんご

ア 果実肥大

暦日比較では、「つがる」は縦径が68.2mmで平年比119%、横径が74.5mmで平年比115%と平年より大きく、「ふじ」は縦径が56.6mmで平年比110%、横径が60.0mmで平年比108%と平年よりやや大きい状況です。

生育日数による比較でも、「つがる」、「ふじ」とともに平年より大きい状況です。

(4) ぶどう

「あづましずく」の着色開始は、長梢栽培が7月15日で平年より1日遅く、短梢栽培が7月15日で平年より1日早くなりました。「巨峰」の着色開始は、まだ認められていません。

気象庁[営農活動に役立つ気象情報] <http://www.jma.go.jp/jma/kishou/nougyou/nougyou.html>

4 栽培上の留意点

(1) 土壌の水管理

土壌の過湿は、葉の褐変や黄変落葉を引き起こす原因となるので、停滞水が発生しやすい園地では排水対策を徹底しましょう。また、落葉した場合は着果量の見直しを行いましょう。

(2) も も

ア 早生品種の収穫

現在、早生品種の収穫が行われているが、核や胚に障害をもつ果実は成熟が早まりやすい傾向にあるため、果肉の軟化に注意し収穫が遅れないように留意しましょう。

イ 修正摘果

硬核期が終了し、肥大不良果や変形果、核に障害をもった果実などが徐々に目立ってきています。このため、収穫を控えた中生種の修正摘果は数回に分けて丁寧に実施するとともに、果頂部が変形している果実や縫合線が深い果実、果面からヤニが噴出している果実、果皮の一部が変色している果実、極端に肥大の早い果実、果頂部の着色が早い果実などは、核や胚に障害があることが多いので、これらの果実に注意して摘果を実施しましょう。

ウ 中生品種の収穫前管理

「あかつき」の収穫期予測では、平年より3日早い見込みです。また、核や胚に障害を持つ果実は成熟が早まる傾向にあるため収穫の遅れに注意が必要です。果樹研究所内の「あかつき」はすでに着色期に入っているが、これ以降の中生種においても、夏季せん定、

支柱立てや枝吊り、反射シートの設置など収穫前の管理が遅れないよう計画的に実施しましょう。特に、曇天続きで日照時間は平年の約50%となっているため、着色管理の徹底に努めましょう。

(3) な し

ア 新梢誘引

不定芽新梢を含めた新梢誘引は、受光条件の改善や防除効果の向上、冬季せん定後の棚付けの省力化が図られることから、必ず実施しましょう。特に「豊水」の新梢は、湾曲したり下垂しやすいことから、新梢誘引により発生方向を整えましょう。

イ 修正摘果

「幸水」は裂果が終息（満開後90日頃）後に修正摘果を実施しましょう。修正摘果は、裂果した果実、変形程度の著しい果実、果点コルク間の地色が薄い果実（肥大が停滞しやすい）及び満開後100日頃の横径が60mm未満の小さな果実を整理し、適正着果に努めましょう。

また、「豊水」は満開後100日頃を目安に小玉果と変形果を摘果しましょう。

(4) りんご

ア 修正摘果

果実肥大や果形、障害の有無等の区別が付きやすい時期なので、小玉果、変形果、病害虫被害果、サビ果を中心に修正摘果を実施しましょう。特に結実数の多かった園地では、仕上げ摘果実施後でも着果過多になりやすいので、修正摘果を実施し適正着果に努めましょう。

イ 枝吊り・支柱立て

果実の肥大にともない枝が下垂するので、樹冠内部の受光条件の改善、枝折れ防止及び防除効果の向上のため支柱立て及び枝吊りを実施しましょう。

また、今後高温条件下になった場合、果実に直射日光が当たることにより日焼け果の発生を助長するため、修正摘果に当たっては着果位置に留意してください。

(5) ぶどう

ア 着果管理

ぶどうの着色始めは、果房中のいくつかの果粒が飛び玉状に濃く着色するのが望ましい状態です。全体的にぼんやりと色がまわってくるような場合は、着果過多によるものと考えられるので、早急に着房数の見直しを行いましょう。また、着色期の日照不足も着色不良を招くため、込み合っている部分の新梢整理も併せて行きましょう。

イ 新梢管理

新梢が遅伸びすると、光合成により生産された養分は新梢の伸長に消費されてしまい、果実への転流が少なくなります。果実品質の低下や新梢の登熟不良を防ぐために、遅伸びしている新梢の摘心や余分な新梢の整理と誘引の見直し、副梢の整理と摘心等を実施し、棚面の明るさを確保しましょう。

具体的には、7月下旬～8月上旬頃に、伸長が停止していない新梢を摘心しましょう。摘心は先端の生長点を軽く摘む程度に行った方が副梢の発生が少なくなります。伸長が停止しない副梢は2～3葉残して摘心します。伸長が停止しそうな弱い副梢は棚面が混み合わなければ、そのまま放置してもかまいません。摘心後も棚下が暗い場合は、徒長的な新梢を中心に、新梢の間引きを行いましょう。このとき、間引く本数は必要最小限にとどめましょう。

5 病虫害防除上の留意点

(1) 病 害

ア リンゴ褐斑病

7月中旬以降は本病の二次感染期となるため、薬剤散布は10日間隔で実施しましょう。

イ リンゴ輪紋病、炭疽病

輪紋病は高温多雨が続くと感染頻度が高くなり、炭疽病については梅雨期が重要防除時期となります。輪紋病又は炭疽病の発生が多い園地では、いずれの病害にも効果のある薬

剤を十分量散布しましょう。

なお、炭疽病の発生を抑制するために、園地周辺のニセアカシア、シナノグルミ、イタチハギなどの伝染源植物を除去しましょう。

ウ モモ灰星病、ホモプシス腐敗病

灰星病及びホモプシス腐敗病の重点防除時期にあるため、いずれの病害にも効果のある薬剤を十分量散布しましょう。

エ モモせん孔細菌病

晩生種で発生が多い場合、マイコシールド 2,000倍を散布しましょう。なお、本剤は使用期間が収穫21日前までのため収穫前日数及び成分回数（オキシテトラサイクリン、散布、5回）に注意しましょう。

オ ナシ黒星病、輪紋病

7月12日現在、果樹研究所の「幸水」殺菌剤無散布樹での黒星病の発病葉率は44.7%と平年（10.3%）より高く、「幸水」果実での感受性が高い時期となります。輪紋病は果実への感染が多くなる時期であるため、注意が必要です。黒星病、輪紋病に効果がある殺菌剤を十分量散布しましょう。さらに、黒星病の罹病部位は見つけしだい取り除きましょう。

(2) 虫 害

ア モモハモグリガ

モモハモグリガ第3世代成虫の発生盛期は平年並に気温が推移した場合、7月6半旬頃と予想され、第4世代幼虫の防除適期は8月1半旬頃と推定されます。本種の発生は、放任園や無防除のハナモモ等が影響していると考えられるため、こうした発生源が近隣にある園地では、今後も発生に注意し、無防除園の管理や放任園の伐採等を行いましょ。

イ ナシヒメシンクイ

ナシヒメシンクイ第2世代成虫の発生盛期は平年並に気温が推移した場合、7月6半旬頃と予想され、第3世代幼虫の防除適期は8月1半旬頃と推定されます。本種は第3世代からなし果実への寄生が増加するため、例年なしでの果実被害が多い地域では、近隣もも園の芯折れに注意するとともに、第3世代幼虫以降の防除を徹底しましょう。

ウ ハダニ類

今後高温が続く場合は、ハダニ類の急増に注意し、要防除水準（1葉当たり雌成虫1頭）の密度になったら速やかに防除を行いましょ。

表1 果樹研究所における防除時期の推定（令和元年7月16日現在）

今後の気温予測	モモハモグリガ		ナシヒメシンクイ	
	第3世代 誘殺盛期	第4世代 防除適期	第2世代 誘殺盛期	第3世代 防除適期
2℃高い	7月27日	7月30日	7月26日	8月1日
平年並み	7月28日	8月1日	7月27日	8月3日
2℃低い	7月30日	8月3日	7月29日	8月6日

注) 起算日：モモハモグリガ7月5日、ナシヒメシンクイ6月24日
(演算方法は三角法)

病害虫の発生予察情報・防除情報

病害虫防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

URL: <http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょ。

発行：福島県農林水産部農業振興課 技術革新支援担当 TEL 024(521)7344

(以下のURLより他の農業技術情報等をご覧ください。)

URL: <http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/>